

「今、私の晴雨計は！」①⑦

「さざなみ」

平山征夫

久方ぶりに考えさせられる映画に出会った。最近のCGを駆使したアメリカ映画は、スーパーマンとバットマンが闘うなど話題作りとアクション偏重がひどく、辟易していた私には、この地味ながら夫婦の微妙な心理のずれを描いたイギリス映画（ベルリン国際映画祭で主演女優・男優の銀熊賞ダブル受賞）は、本来の映画の持つ深い意義を思い起こしてくれた。新潟市にある市民映画「シネウインド」はいろいろの国の良い映画を探して上映してくれる

ので時折観に行く。そのウインドの責任者のSさんに逢ったら「今、上映中の映画がヒットして久方ぶりに満席状態です。しかも圧倒的に女性客です」と言う。「さざなみ」という映画がヒットしているのだそう。そのすぐに地元紙に日本を代表する本県出身の映画評論家佐藤忠男さんが映画評論に取り上げた。それを添付するのであまり映画の内容をくどくど述べるのは避けたいが、その時はまだ上映中だったからか、何か佐藤さんの評論にはわざとポイントを外したところがあるように思えたので、上映が終わったことでもあり、必要な範囲でストーリーを追いながらこの映画のことを話してみたい。

週末に結婚四十五年のパーティを控えた夫婦の月曜日、さざなみの原因となるしらせが夫・ジェフに届く。スイスの山で五十年前氷河の割れ目に落ちて亡くなった昔の恋人が氷の中から発見されたという知らせだ。若いま昔の恋人が現れたというのが重要で、ジェフは日増しに過去の彼女との恋愛の記憶を甦らせてゆく。一方、妻・ケイトは存在しない女性への嫉妬心を募らせてゆく（こ

こまで読んで、DVD化されたらこの映画を観ようと思った人はこの先は読まないでください）。この映画の優れているひとつが二人の交わす会話の妙だ。一度見ただけで記憶は曖昧でそのセリフの味は出せないが、何とか思

い出して再現してみよう。「それであなたはどうするの。遺体に逢いに行くの?」「いや、遠いし山の上だから行けないよ」「そんな人がいたなんて!」「彼女のことは前に一度君に話したよ。あの日はガイドと3人で氷河の上を歩いていた。先に行く彼女とガイド、突如彼女の笑い声が消えて……」

「もし彼女が生きていたらあなたはどうしたの。一緒になった?」「そうしただろうね。そういう約束だったし……」。週末に向ってこんな会話が続いたある夜、ジェフはケイトに久方ぶりにセックスを求める。それに応じたケイトがその最中に叫ぶ。「眼を閉じないで!」「このセリフはこの映画の中で二人の気持ち水分水嶺で別

れてゆくのを暗示する重要な意味を持っていると私には映ったが……。その夜中、ジェフは屋根裏部屋で過去の恋人の写真

など遺品を探していた。「こんな夜中、何してるの?」「確か彼女の写真があったはずだと思っ  
て!」。翌日朝、妻に運転を頼まず「バスで街に行く」とメモを残して外出したジェフ。ケイトは屋根裏部屋で昔の恋人の映った写真(スライド?)を見つけ  
るが、そこに映っていた彼女のお腹は心なし大きかった。そして追  
いかけて街に行ったケイトは、訪れた旅行会社で夫がスイス行き  
の相談をしていったことを知る。  
「私、今日旅行会社に寄ってみたの。あなた、相談に行ったそうね。

やはりスイスに行くの?」「いや、それはもう無理だよ……。二人の会話が静かに進む、そして二人の心は次第に離れてゆく。

週末、友人たちが集まって結婚四十五周年の御祝いの会は盛大に開かれる。最大の見せ場はジェフのスピーチだ。「ケイトと結婚して四十五年が経った。あつという間だった。このお祝いの会で二つのことを告白したい。もうこの歳になると人生を左右するような重要な判断をすることはなくなる一方、若い時行った判断についてどうだったのだろうか」と振り返ることがある。そして私は今、私の人生で最も重要な判断を正しく行ったことを確信していると告白したい。それはケイトとの

結婚を決断したことだ。そしてもう一つ告白したい。今でも彼女を深く愛していることを……」。

大きな拍手の中、二人の指名した曲が流れ二人が踊る。続いて皆も踊り始める。曲は四十五年前結婚式で流れた「煙が目に染みる」だった。ラストシーンは印象的だ。二人の踊りがワンクール終わつた時、ケイトは振りほどくようにジェフの手を離して踊りの輪から外れたが、その眼は何かを睨むように鋭い眼差しで前方に注がれていた。

演)と同世代だそうだ。主演男優のトム・コートネイ(七十七歳、「長距離ランナーの孤独」でデビュー、最近も「カルテット」人生のオペラハウス」で好演)と同世代の男の観客は少ないそうだと  
言うことはこの映画は、夫婦ではなく多くは女性だけで見に来ているということか? 私はその逆だが、正直「一人で良かった。この映画を妻と観るのはちょっと辛い」と思った。観た人の多くは「ジェフを通じて男の身勝手さが分かった」「女性の潔癖さは怖い」などのほか、

「何時まで経っても男はロマ  
ンに生きるが、女性は現実  
に生きるのだなあ。その違いがよくわかった」と言う感想が多いようだ。

これ以上この辺の議論を進めると、以前「晴雨計」で女性の鬼婆化論争があったが、その二の舞になりかねないのでやめておく。因みにこの映画の監督のアンドリュウ・ヘイは「価値観が違うことを突き付けられた人が、それでも生きて行く様を描きたかった。人間にとってそれ以上辛いことはないと思うのです」と語っている。

この老夫婦に起こったさざなみは静かに収まってゆくのだろうか、それとも大波になって仕舞うのだろうか。そう考えたところでハット気づいた。「そうだが我々も来年結婚四十五周年だ!」……。

(平成二十八年七月二十二日)

# 佐藤忠男のシネマスコープ

## さざなみ



映画「さざなみ」より

幸せな結婚生活をしている老夫婦の、晩年のちょっとしたさざなみを描いた、地味で渋い、だからこそすてきなイギリス映画の佳作である。

近く友人たちが彼らの結婚45年の記念日を盛大なパーティーで祝ってくれることになつてゐる。そんなところに、かつての夫の恋人で、アルプスの氷河に落ちて死んだ女性の遺体が半世紀も経て発見されたという知らせがくる。水に包まれていた遺体はきつと若くて美しいままに違いない。

## 夫婦の微妙なやりとり

とららいでこの夫婦の間にヒビが入るはずもないのだが、でもさざなみは生じるのだ。それはむしろ、まだまだこの人の気持ち若さ、この証拠というべきことなのであるが、でも放つておけば良いということでもない。というところで本当に微妙な夫婦のやりとりが巧みに描かれることになり

妻を演じるのはシャーロット・ランプリング。この演技でアカデミー主演女優賞にノミネートされたのはじめ、欧米のめぼしい演技賞をさらっている。

夫を演じたのはトム・コートネイ。青年時代に数本映画に主演して、その後舞台が主になって映画は久しぶり。すっかり名優ふうになつてゐるが古いファンとしては懐かしい。若い頃には熱演する個性派だったこ

の2人が、いまや味わいのある演技で見せる、いかに名優らしい役者になつてゐる。そしてその組み合わせが実に良い。

彼と彼女の結婚記念日を親しい人々が集まつて祝つてくれるのがラストシーン。日本でも、金婚式とか銀婚式というのはあるが、一般にはあまりやらないし、やっても家族や親戚が主になるだろう。この夫婦の場合は本当に友人たちが祝福してくれる。これは日本でも大いにまねしたらいと思つ。お義理ではなく、職業や組合や地域による地道な仲間づくりと、それを基礎にした社交の豊かさがよく分かつて、これはいいなあと思つた。

脚本と監督はアンドリュウ・ヘイ。

(シネ・ウィンドで上映中)